

## 仙台伊達文化の末席に



仙台藩茶道石州流清水派

御 供 真 人

「武士は武芸に精を入れて兼て少しく天文地理を知り亦少しく茶の湯と猿樂（能楽）とを知るべし。（中略）日本当世の大札この二つに在り。然れば日本に生れて此の二つを一図（途）に知らざるは日本の制に背くに似たり。是故に右の二つをば少しづつ子弟に教ふべし。是れ亦父兄たる者の心得なるべし。」

少年の時分、尊敬する仙台の先哲林子平先生が武家教育を著した『父兄訓』の言葉に出会い、いずれは茶と能を学びたい、殊に仙台で生まれ育った者として本物の伊達文化を学びたいと考えておりました。仙台藩では公式な役職として茶道頭（茶道）と乱舞方（能楽）があり、藩主・藩士の指南、外交、公の儀式を担っておりました。それを現代まで受け継いでいるのが石州流清水派（以下、当流）宗家

と喜多流職分佐藤家です。

ここで、筆者の略歴と当流入門の経緯について簡潔に紹介いたします。学生時代に能楽は喜多流佐藤家十一代章雄師に入門。以来二十六年間、十二代寛泰師と二代にわたり師事し謡と舞を稽古しております。また、武芸は仙台藩登米伝承の西法院武安流武者捕を故柴田茂師のもとで修行。相伝を受けて師範となり十数年、漸く弟子に免許皆伝を許す目途が立ちました。同じ頃、山形県米沢市の秘湯、大平温泉滝見屋の若女将と結婚の話が進み、宿の手伝いにもてなしの心を学ぶようにとの応援もあり、今こそ茶の湯の時節到来ならんと当流宗家十一世大泉道鑑師の門を敲いた次第です。

日本文化を学ぶとは、型を稽古し、文字に表し難い身体遣いや呼吸を身に付けて、日々の生活を修行とするものですが、流儀の来歴や故実について知る事でその意味を味わい深める事も大切だと思っております。入門間もない平成三十年（二〇一八年）二月、仙台市文化事業団主催「桃山やしき」のイベントで行われた十一世大泉道鑑師による講演「伊達家の正式な茶道」で、村田珠光から始まり千利休が大成したわび茶の歴史、古田織部、小堀遠州、片桐石州



図1 『清水動閑註解石州流三百箇條』  
(十一世大泉道鑑蔵)

の武家茶道、中でも徳川將軍家の茶道・大名茶として一世を風靡した石州流は三百箇條(図1…当流の代を継承した印のひとつ)二世清水動閑註解石州流三百箇條」と云う原点たる規矩がある事や流儀を血筋だけにとらわれずに茶系伝承で伝えて来た事、三世清水道竿(馬場道齋)が開いた仙台藩伊達家の茶道石州流清水派の確立と全国への発展、

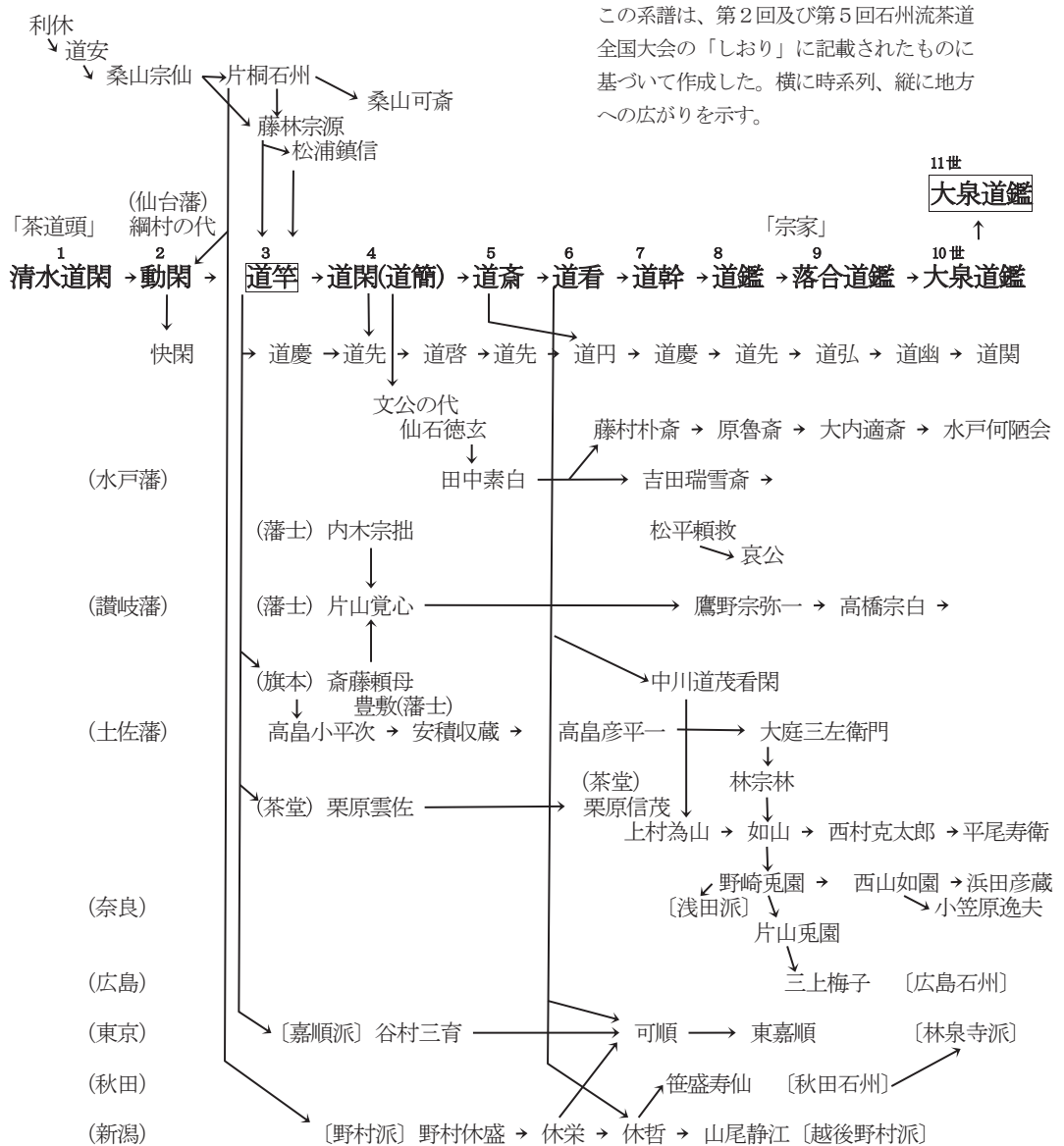
その特徴とされる「雅びたわび」が藩政時代のまま歴代の茶道頭・宗家(次頁図2…石州流清水派の系譜参照)により今日まで聊かも変わらず正しく継承されてきた事等、体系的に教えを受けた内容に深く感銘を受け、稽古初心に当たり大変貴重な機会となりました。

最後に、茶の湯は門を潜ったばかりの浅学愚見でありませんが、筆者の考えを述べて本稿を終えさせていただきます。茶は作法、能は式楽として、武家の心得でした。現代も日本文化の根本として、武士の姿勢や所作、身体遣い、考え方を身に付ける事が出来ます。芸は一代(の工夫)、流儀は末代までの宝(型、手前)です。先人から宝を受け継ぎ、日々の生活で楽しむだけでなく、後世に伝える事が大切と思います。仙台伊達文化の末席に座らせて頂いたご恩に報い、次世代への伝承のお役に立てるよう精進して参りますので、諸先輩方のご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願ひ申し上げます。

参考文献(五十音順)

『喜多流の成立と展開』表章 平凡社

一九九四年(平成六年)



この系譜は、第2回及び第5回石州流茶道  
全国大会の「しおり」に記載されたものに  
基づいて作成した。横に時系列、縦に地方  
への広がりを示す。

図2 石州流清水派の系譜

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世大泉道鑑

丸善出版サービスセンター 一九八〇年(昭和五十五年)

『関』二十九号 十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会

二〇一九年(令和元年)

『石州流 歴史と系譜』野村瑞典 光村推古書院

一九八四年(昭和五十九年)

『茶の湯文化学』二十八号 十世清水道鑑・十一世清水道鑑

茶の湯文化学会 二〇一七年(平成二十九年)

『父兄訓』林子平 六無會 一九三六年(昭和十一年)

『宮城県史2近世史、14文学・芸能』宮城県 ぎょうせい

一九八七年(昭和六十二年)

## 付記

大泉道鑑先生より、先生所蔵の『清水動閑註解石州流三百箇條』の写真の使用(図1)、『茶の湯文化学』二十八号及び『関』二十九号からの図2の引用について許可を得ております。

なお本稿執筆にあたり先生より特に、二世清水動閑が残された三百箇條を直に拝見させて頂いた事は望外の喜びでありました。石州公が三百箇條を定めた時代に書かれた事、

石州流三百箇條の原本は、この清水動閑註解を含む数点しか現存していない事からも、当流の代を継承した印であり、正に流儀の至宝であることを、言葉でなく心で理解できました。



宮城県の県花：ミヤギノハギ  
(別名「センダイハギ」と呼ばれる)